別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年　5月　1日

氏名　　細矢智子　印

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	基礎看護学，看護教育学，看護技術

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育上の実践例		
1）大学院における教育		
・茨城県立医療大学保健医療科学研究科博士前期課程看護学専攻の研究支援	平成28年度	松田たみ子教授の指導学生の研究遂行において，学外共同研究員の立場から指導に加わり，調査紙作成の助言および支援を行った。
・常磐大学大学院看護学研究科（修士課程）	令和4年度～現在に至る	看護管理教育学領域で、特論、演習を担当し、研究指導を行っている。
	令和5年度～現在に至る	看護管理教育学領域で、実践課題研究で研究指導を行い、高度実践実習（教育）で実習指導を担当している。
2）看護系大学における教育		
(1)つくば国際大学における実践		
・看護技術に関する授業 「基礎看護技術Ⅰ」1単位 「基礎看護技術Ⅱ」2単位 「基礎看護技術Ⅲ」2単位	平成19年度～平成29年度	パワーポイント，DVDの活用による視覚的な側面から分かりやすい授業の工夫を行い，学生の自己学習を促進するための課題を設定した。演習時は，模範的な実践例を実演し，グループ指導で看護行為のエビデンスを意識させる指導を行った。また，リフレクションを目的とした演習後レポートに対する助言を行った。科目内で技術試験を実施し，学生の自己練習時の指導，技術試験後の評価のフィードバックを行った。
・看護過程に関する授業 「看護過程論」2単位 「基礎看護学援助論」2単位	平成20年度～平成23年度 平成24年度～平成29年度	看護過程の学習における事例展開では，授業時間内でグループ指導を行い，必要時個別指導も加え思考過程の習得を目指した指導を行った。情報を解釈，分析する具体的な方法を提示し，エビデンスに基づいたアセスメントの重要性を指導している。また，看護計画においても根拠に基づき個別性を重視した具体策を立案するよう助言した。
・看護学実習に関する授業 「基礎看護学実習Ⅰ」1単位 「基礎看護学実習Ⅱ」2単位 「総合実習」2単位	平成19年度～平成29年度	実習では，施設担当として統括的な役割を担い，またグループ担当として，臨実習指導者と協力し，日常生活援助の実践の提示と学生の実践支援を行った。学内学習した看護技術を臨床で応用させていく具体的な援助方法について直接指導した。 平成29年度の「総合実習」では実習の統括的な役割を担った。
・看護研究に関する授業 「看護研究」1単位	平成25年度～平成29年度	文献クリティークのグループ指導において，資料の提示や助言により学生のクリティカルシンキングを向上させるための指導を行った。。
・看護師国家試験に関連する授業 「看護学セミナー」	平成22年度～平成29年度	科目内で基礎看護学に関する授業を実施した。看護師国家試験を見据えた授業内容の工夫を行った。
(2)常磐大学での実践		
・看護技術に関する授業 「基礎看護援助技術Ⅰ」2単位 「基礎看護援助技術Ⅱ」2単位 「ヘルスアセスメントⅠ」1単位	平成30年度～現在に至る	基礎看護援助技術Ⅰ・Ⅱは科目責任者として授業を担当している。パワーポイント，DVDの活用による視覚的な側面から分かりやすい授業の工夫を行い，学生の自己学習を促進するための課題を設定している。大学で設定している学修支援システムを活用し，事前・事後課題や動画をインターネット上に掲載し，学生のICTスキル向上に努めている。また科目内で技術試験を実施し，学生の自己練習時の指導，技術試験後の評価のフィードバックを行い，学生の看護実践能力の向上に努めている。
・看護過程に関する授業 「情報と看護展開Ⅰ」2単位	平成31年度～現在に至る	科目責任者として授業を担当し，看護過程，看護診断，臨床判断モデルについて講義し，「大腿骨頸部骨折患者」「脳梗塞患者」の事例展開より，看護の展開を教授している。

・看護学概論に関する授業 「看護学概論」2単位	令和4度～ 現在に至る	科目責任者とて授業を担当し、看護の概念、看護の歴史、看護理論、看護の役割と機能などについて教授している。
・看護倫理に関する授業 「看護倫理」1単位	令和4度～ 現在に至る	科目責任者とて授業を担当予定である。看護倫理とは何か、実習での倫理的課題についてグループワークを通して学生の理解を深める予定でいる。
・看護学実習に関する授業 「基礎看護学実習Ⅰ」1単位 「基礎看護学実習Ⅱ」1単位 「基礎看護学実習Ⅲ」2単位	平成30年度～ 現在に至る	「基礎看護学実習Ⅰ」では科目責任者と調整し統括的な役割を担っている。「基礎看護学実習Ⅱ」「基礎看護学実習Ⅲ」では，科目責任者として3施設での実習を統括している。
「統合実習」2単位	令和3年度～ 現在に至る	「統合実習」において基礎看護学領域の学生を担当し、指導を行っている。
2　作成した教科書，教材 ・基礎看護技術のデモンストレーションDVD（学内用）の作成	平成19年度～ 平成21年度	学生が看護技術の自己練習に使用するための，「ベッドメーキング」「臥床患者のシーツ交換」「体位変換」に関するデモンストレーションDVDを作成し，実演部分を担当した。
・基礎看護技術の自己練習用e-learning教材の作成	令和2年度～ 現在に至る	皮下注射の技術試験に向けた，学生が自己練習で活用できるe-learning教材を作成した。
・「看護過程論」演習教材として事例展開作成	平成20年度～ 平成23年度	ゴードンの11機能パターにもとづく脳梗塞の事例展開教材の一部（排泄・活動）を作成した。
・「基礎看護学援助論」演習教材として事例展開作成	平成24年度～ 平成25年度	ゴードンの11機能パターにもとづく心筋梗塞の事例展開教材の作成に関わり，主に問題リストを作成した。
	平成26年度～ 平成27年度	ゴードンの11機能パターにもとづく大腿骨骨折の事例展開教材の作成に関わり，主に問題リストを作成した。 また，平成27年度は看護過程の「経過記録と評価」の講義を担当し，糖尿病の事例展開における，叙述的経過記録と評価の演習に用いる展開例を作成した。
・「情報と看護展開Ⅰ―看護の展開―」教材として，講義要項，事例展開作成	平成31年度～ 現在に至る	看護過程，看護診断，臨床判断モデルに関する講義要項を作成した。また，演習で使用する大腿骨頸部骨折，脳梗塞の事例展開教材を作成した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 ・学生による授業評価	平成21年度～ 平成29年度	看護技術に関する科目では，ほとんどの項目で学科平均を上回り，総合的満足は5段階評価で4.5程度を維持している。
・学生による授業評価	平成30年度～ 現在に至る	看護技術に関する科目の授業評価で4段階評価で，項目平均3.48の評価を得た。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）学会活動		
・第6回日本ヘルスプロモーション学会　一般演題座長	平成20年度	一般演題座長として研究発表の司会・進行を担当した。
・第25回いばらき医療福祉研究集会　一般演題座長	平成24年度	第25回いばらき医療福祉研究集会で一般演題の座長を担当した。
・第23回摂食嚥下リハビリテーション学会運営補助	平成29年度	学科開催2日間にわたり，一会場の運営責任者として学会運営に携わった。
・第28回聖路加看護学会学術大会事務局	令和4年度5月 ～ 現在に至る	第28回聖路加看護学会学術大会の常磐大学事務局を担当している。
2）看護職・多職種への教育支援		
・阿見町社会福祉協議会ヘルパー養成講習演習補助	平成14年度～ 平成15年度	阿見町社会福祉協議会主催のヘルパー養成講習会で介護技術の演習指導を行った。
・茨城県専任教員養成講習会演習指導	平成18年度	茨城県看護協会主催，専任教員養成講習会の「看護教育方法演習・基礎看護学」で演習指導を担当した。
・土浦協同病院看護研究発表会講師	平成22年度	土浦協同病院の看護研究発表会の講師として講評を担当した。

・牛久愛和総合病院看護部教育委員会研修講師	平成24年度～ 平成25年度	牛久愛和総合病院の看護部教育委員会研修会の講師として，卒後2年目の看護師を対象にフィジカルアセスメントに関する講義と演習を担当した。
・茨城県専任教員養成講習会講師	平成24年度～ 平成28年度	茨城県専任教員養成講習会の講師として「看護教育課程論・基礎看護学」（4時間）を担当した。
3）地域貢献		
・つくば国際大学高校生対象公開講座講師	平成24年度～ 平成25年度	つくば国際大学の高校生を対象とした公開講座で講義を担当した。看護職の役割について，平成24年度は日常生活援助の移動動作の援助を中心に，平成25年度は清潔援助を中心に講義した。
・茨城県立牛久高等学校第2学年プレカレッジ講師	平成27年度	高校2年生22名を対象に「バイタルサインについて」のテーマで講義と演習を取り入れた90分の授業を行った。
・県立高校学校評議員	平成30年度～ 平成31年度	看護科を有する茨城県立岩瀬高等学校の学校評議員として学校運営に関する意見交換を行った。
5　その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許 ・看護婦免許	平成2年4月	第681579号
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）競争的資金の獲得 ・科学研究費補助金 平成16年度・基盤研究(C)(2) e-learningによる「妊婦健診に必要な看護ケア」の 学習支援に関する研究	平成16年6月～ 平成17年3月	本研究において，研究分担者として基礎看護学における基本的な看護技術に関する内容の精選を行った。 研究代表者：島田智織 研究分担者：小松美穂子，服部満生子，梶原祥子，丹下幸子，細矢智子
2）研究助成金 ・茨城県立医療大学研究助成（奨励研究）	平成16年度	奨励研究費の助成を受け，「リハビリテーション専門病院における基礎看護実習の看護技術に関する学習内容と課題」について単独で研究を行った。リハビリテーション専門病院で行う基礎看護学実習の中で看護技術の学習内容と課題を明らかにすることを目的に，平成15年度の実習を経験した51名の学生の看護技術チェックリストと実習後の課題レポートを分析した。本研究は40万円の助成を受け実施した。
・常磐大学課題研究助成	平成30年度～ 令和2年度	研究助成を受け「看護職志望動機に関する研究」を共同で行った。本研究において，研究代表者として研究全般にわたり統括的役割を担った。本研究は，3年間で76万5千円の助成を得た。 共同研究者：細矢智子，山口幸恵，北島元治，河津芳子
・日本看護学教育学学会研究助成	令和4年度	研究助成を受け、看護学実習における学生の「振り返り」に影響する要因― 「自己を見つめる力」と振り返り内容との関係 ―を共同で行った。共同研究者として分析、助言を行った。本研究は12万7千の助成を受け実施した。 研究代表者：山口幸恵、共同研究者：細矢智子
3）大学との共同研究 ・茨城県立医療大学学外共同研究員	平成27年5月～ 平成30年3月	茨城県立医療大学，基礎看護学領域の松田たみ子教授の研究室で，看護技術の清潔援助に関する研究を共同で行った。
4　その他		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
（学術論文） 1.糖尿病患者の自己管理に関する研究-血糖コントロールの指標と行動の目安に着目して- （修士論文）	単著	平成10年10月	常磐大学大学院	糖尿病患者がHbA1c値や血糖値のような血糖コントロールの指標をどのように捉え，日常生活においてどのような目安を設定して自己管理を実施しているかについて，外来通院している11名を対象に面接調査を行った。その結果，自己の基準を定める，医師の判断に任せるなど個々における血糖コントロールの指標を捉え方があり，日常生活の中で何らかの目安を設定し，食事や運動などの生活の調整を行っていることが明らかになった。さらに，糖尿病患者への関わりにおいては，日常生活を支えるという意味で基本的な看護の要素が大きく関係していることが示された。
2.糖尿病患者の自己管理に関する研究-血糖コントロールの指標と行動の目安に着目して-（査読付）	単著	平成13年3月	人間科学論究　第9号 （常磐大学大学院） P71-P87	修士論文の一部を加筆，修正し投稿した。
3.終末期看護実習における看取りの体験－実習記録および感想文の分析をとおして－（査読付）	共著	平成13年1月	第31回日本看護学会論文集-看護教育- P206-P207	終末期看護における教育活動について検討するために終末期看護実習の中で看取りを体験した学生の実習記録に焦点を当て，学生の体験内容を明らかにした。その結果6つの体験内容が抽出され，看護者としての死の準備教育では，(1)終末期患者に必要な基本的看護ケアの習得に向けた教育活動，(2)看護実戦場面における看護過程の展開を直接支援する教育活動が必要であり，死の準備教育として死生観を考え深める動機づけを行なう教育活動の必要性が示唆された。終末期の対象であっても基本的な看護ケア，看護過程の展開は基礎看護学において十分な教育を担っていく重要性が明らかになった。本研究においてデータ収集，分析を共同で担当した。 共著者：丹下幸子，金子昌子，細矢智子
4.老人看護学実習における介護老人保健施設実習の一考察	共著	平成14年3月	茨城県立医療大学紀要 第7号 P171-P179	介護老人保健施設（老健）実習の学生の記録を資料とし，内容分析を行った。学生は高齢者を多様な側面から統合して理解し，相手のペースを尊重した関り方を学習していた。介護職との協働では，施設における看護の役割と病院との違い，高齢者の生活を支える視点について学んでいた。そして，老人看護学実習における老健実習は，高齢者の理解とともに高齢者の生活の視点からケアをとらえる特徴的な学びが明らかになった。また，共通する学びの内容には，看護過程に関するものやコミュニケーション技術に関するものがあり，基礎看護学の学習が基盤となっていることが示された。本研究においてデータ整理，分析を共同で担当した。 共著者：安川陽子，細矢智子，ほか3名
5.成人・老人看護学実習における学生の学び－リハビリテーション看護領域の実習感想文より－	共著	平成16年3月	茨城県立医療大学紀要 第9号 P119-P131	成人・老人看護学実習のうちリハビリテーション看護領域で実習した学生23名の実習後の感想文を内容分析した結果，以下の学生の学びが明らかになった。1)看護の対象理解・援助方法・評価についての学び，2)医療チームにおける看護職の専門性と役割及び具備すべき用件についての学び，3)実習で得た充実感とそのふり返りによる自分の特性・成長への気づきや学習への反省，4)専門職としての看護提供のあり方と責任についての学び，5)実習による講義内容の理解の広がりと深化，6)ケアにおける看護者－患者間の相互作用についての学び，7)熟練看護師の実践への感銘。以上より，基礎看護実習での経験を踏まえた，学びの広がりが明らかになった。本研究においてデータ整理，分析を共同で担当した。 共著者：鈴木純恵，丹下幸子，細矢智子，他5名

6.基礎看護実習に関する研究の分析－過去5年間の関連文献を通して－（査読付）	単著	平成16年3月	茨城県立医療大学紀要 第9号 P147-P155	基礎看護実習に関する過去5年間の関連文献47件を対象に，研究方法および研究内容について分析した結果，研究方法は，研究デザイン，研究対象，データ収集法，測定用具，分析方法で隔たりが見られ，研究内容は以下に分類された。1)実習による学習成果に関する研究，2)実習指導の工夫と成果に関する研究，3)看護学生の基礎看護実習における身体的心理的特性に関する研究，4)看護過程の展開に関する研究，5)実習における対人関係に関する研究，6)「看護技術」「看護倫理」教育への考察に関する研究，7)その他。「看護技術」「看護倫理」に関する研究は少ないため，今後研究を発展させていく必要性が示唆された。
7.リハビリテーション専門病院における基礎看護実習の取り組みとその成果（査読付）	共著	平成16年3月	茨城県立病院医学雑誌 第22巻　第2号 P75-P82	リハビリテーション専門病院における基礎看護実習が学生にどのような影響を及ぼしたのか，取り組みを評価しその成果を検討することを目的に，51名の学生の実習後感想文を内容分析した結果，6つのカテゴリーが抽出された。学生は不安や大変さを感じながらも，様々なことを学び，学内とは異なる環境下で受け持ち患者や看護師また教員との関係性をとりながら，看護や看護学に対し前向きに取り組んでいた。さらに，リハビリテーション専門病院に対する興味・関心とそこで働く看護師への敬意を感じ，リハビリテーション看護の視点に立った気づきや学びが得られている内容も存在した。また，週2日間という病棟実習の実習形態に関しての感想は，概ね良好であった。本研究では，研究代表者として研究遂行の全てにおいて責任を持って行った。 共著者：細矢智子，間野聡子，野々村典子
8.食事介助における患者役割体験の学習効果（査読付）	単著	平成18年3月	つくば国際短期大学紀要 第34輯 P171-P179	基本的な看護技術である食生活の援助技術における，食事介助の演習で患者役割体験を行うことによる学習効果を明らかにするため，演習後の40名の学生のレポートを内容分析した。演習時の患者の状況設定として三つパターンを設け，看護師役割・患者役割に分かれて食事介助の演習を行った。その結果，1)患者心理に関する記述，2)障害や体位の制限による食事動作の難しさに関する記述，3)食事介助の要点に関する記述，4)自分で食べられることへの感謝に関する記述，5)看護師役の学生に対する要望に関する記述，の5つのカテゴリーが抽出された。これにより，患者役割を体験することで，学生に患者の理解と看護技術を工夫する視点の理解が得られ，演習における患者役割体験の意義が示唆された。
9.A大学看護学科学生のインターネット利用環境e-learningコンテンツの開発に向けた基礎調査（査読付）	共著	平成19年3月	茨城県立医療大学紀要 第11巻 P123-P129	看護基礎教育におけるe-learningコンテンツの開発の可能性を検討するために，看護学生のネットワーク利用環境に関する基礎的調査を行った。対象はA大学看護学科1年生から４年生の学生203名である。方法は無記名自記式アンケート調査で，調査項目は，パーソナルコンピューターと，携帯電話・ＰＨＳに関するものとした。その結果，パーソナルコンピューター所有率が88%，パーソナルコンピューターを所有していない学生の携帯電話の所有率は95。5%であったことから，大学外でネットワークを利用することができる環境にあることが明らかになった。今後は，学生が興味関心をもってe-learningを活用して主体に学習できる環境づくりをしていくことが課題である。本研究において，データ収集および整理，分析を共同で担当した。 共著者：安川揚子，細矢智子，駒崎俊剛，島田智織，小松美穂子

10.食事介助の演習における学生の学習内容－看護師・患者役割のレポート比較から患者役割体験の学習効果を探る－（査読付）	単著	平成19年6月	つくば国際短期大学紀要第35輯 P131-P140	食事介助の演習で看護師役割を体験した学生のレポートから学習内容を明らかにし，さらに，すでに報告済の患者役割のレポートの学習内容と比較し，患者役割体験を行うことによる学習効果を明らかにするために，演習後の40名の学生のレポートを内容分析した。その結果，学習内容を示す５つのカテゴリーが抽出された。また，看護師・患者役割のレポートの内容を比較すると，「食事介助の要点に関する記述」「患者心理に関する記述」はどちらにも共通して含まれていた。しかし，看護師役割のレポートは「食事介助の要点に関する記述」が多く，患者役割のレポートは「患者心理に関する記述」が多かった。このことから，演習で患者役割体験を行うことは，患者理解の視点を得るのに有効であることが強調され，演習における患者役割体験の学習効果が示唆された。
11.基礎看護技術の演習における患者役割体験による学生の認識と心理的状態（査読付）	共著	平成20年3月	つくば国際大学研究紀要第14号 P189-P201	基礎看護技術の演習で患者役割を体験した学生の認識と心理的状態を探ることを目的に，A短期大学看護学科１年生を対象に調査を行った。その結果，全体的に学生は患者役割を体験することで患者の心理や看護技術の要点を理解し，看護を学習する上で役に立つという認識が強いことが明らかになった。また，排泄に関する技術演習項目で，学生は自分が患者役として恥ずかしさや苦痛を感じていても，患者の心理を理解するという認識には至っておらず，今後この点を結びつける指導上の工夫が必要である。そして演習内容によって恥ずかしさを感じ，看護師役の学生に対する遠慮などが見られ，学生が心理的侵襲を受ける可能性は完全には避けられない状況にあるため，この点を考慮した授業の取り組みの必要性が示唆された。本研究では，研究代表者として研究遂行の全てにおいて責任を持って行った。 共著者：細矢智子，佐々木美樹，山崎智代，小山英子
12.導尿演習で看護師・患者役割体験の順序と学習内容に関する一考察－演習後レポートの内容分析から－（査読付）	共著	平成21年3月	つくば国際大学研究紀要第15号 P181-P195	導尿の演習で，看護師・患者役割体験の順序と学習内容の関連について検討することを目的に， 57名の演習後のレポートを分析した。その結果，先に患者役を体験した学生の７割がその後の看護師役にいかせたと感じていた。看護師役割のレポートからは５つのカテゴリが，患者役割のレポートからは３つのカテゴリが抽出された。それぞれのレポートに患者への配慮に関する記述が見られ，役割の順序において大きな差異は認められなかった。これは，レポートが両役割体験後の演習後に記述されている点が関係していると考えられるが，学習内容の面で学生間の公平性が保たれていることがわかった。本研究では，研究代表者として研究遂行の全てにおいて責任を持って行った。 共同研究者：細矢智子，山崎智代，佐々木美樹，小山英子
13.清拭に関する研究内容の分析―過去10年間の研究論文を通して―（査読付）	単著	平成22年3月	医療保健学研究 第1号 P55-P65	清拭に関する研究の動向を明らかにすることで，今後この領域における研究の基礎的な資料を得ることを目的に，過去10年間の研究論文を対象に分析した。医学中央雑誌Web版において「清拭」「看護技術」のキーワードで検索を行い，最終的に53件の研究論文を抽出した。分析の結果，研究の内容は，1）清拭技術教育の評価に関する研究，2）清拭技術が生体に及ぼす影響に関する研究，3）石鹸や沐浴剤が生体に及ぼす影響に関する研究，4）臨床看護師の清拭の実際に関する研究，5）その他に分けられた。そして，過去10年の清拭に関する研究の動向は，看護基礎教育における技術教育の重要性の高まりと，EBN志向に基づいた看護技術の根拠の検証が影響していた。

14.採血演習における患者役割体験についての学生の認識―採血終了後の調査から―（査読付）	共著	平成22年3月	医療保健学研究 第1号 P171-P182	基礎看護技術演習における学生間採血による患者役割体験の学生の認識を明らかにするため，質問紙調査を行い，同意の得られた58名を対象に分析した。その結果，94。9%の学生は患者役割を体験して良かったと肯定的に受け止め，98。3%が患者役割体験を通して患者の心理が理解できた，98。3%が患者役割体験が採血技術習得に役立ったと回答した。多くの学生が患者役割体験をとおして採血実施上重要な技術を学んだと認識していることが明らかになった。本研究においてデータ収集および整理，分析を共同で担当した。 共著者：平田礼子，山崎智代，細矢智子，小山英子
15.学生間での採血技術演習における看護師役割体験の学習内容―学内演習後の質問紙調査の内容分析から―（査読付）	共著	平成22年3月	医療保健学研究 第1号 P183-P191	基礎看護技術の演習において学生間での人体への採血実施を通して看護師役割体験をした学生の反応と，学生が困難と感じた採血手技の要素を明らかにすることを目的に，同意の得られた58名の学生を対象に調査した。その結果，手技に関し「駆血帯を適切に巻き，はずすこと」は約5割，「安全な注射針の抜去」「皮膚の伸展」は約4割ができたと回答し，学生が困難に感じた項目では，「注射針が血管に入った感じがわかった」は約5割，「すばやい針の刺入」は約4割であった。学生は人体とモデル人形との違いに緊張と不安を示し，モデル人形の練習だけでは人体の個別性に対応しきれないことが示唆された。本研究においてデータ収集および整理，分析を共同で担当した。 共著者：山崎智代，平田礼子，細矢智子，小山英子
16.母性看護学領域のe-learningシステムの構築と評価（査読付）	共著	平成22年3月	茨城県立医療大学紀要 第15巻 P7-P13	母性看護の学習を支援する道具としてのe-learningシステム構築とその評価を目的に，スクリプト言語（Perl and PHP）を用いて実装し，母性看護実習履修者54名に提供した。利用者16名のログオン回数は平均1.3回，合計滞在時間は平均58.0分であり，良好な評価を得た。非利用者38名が利用しなかった主な理由は「実習中の時間確保の困難」と「コンピュータリテラシの問題」であった。今後は学生の意見を参考に，より利用しやすい提供環境を整えていく必要性があることが　わかった。 本研究のe-learningシステム構築において，基礎看護学領域から看護学全般の整合性に関しアドバイザーの役割を担った。 共著者：島田智織，細矢智子，安川揚子，駒崎俊剛，小松美穂子，江守陽子
17.グリセリン浣腸準備における浣腸液の温度に関する研究―60ml容器を袋のまま加温する方法―（査読付）	共著	平成23年3月	医療保健学研究 第2号 P79-P86	グリセリン浣腸（以下，GE）容器の表面温度と容器内部の中心温度の関係を明らかにし，60mLのGE液を袋のまま加温する場合，至適温度に達するための加温方法の目安を探ることを目的に，表面温度の測定には赤外線放射温度計，中心温度の測定にはデジタル温度計を用いて実験を行った。その結果，ピッチャーに50℃の湯を1L入れ，袋から出したGE液60mLを3分間加温した場合，表面温度と中心温度は有意に異なり，中心温度と表面温度の差の平均は1.5±0.3℃で，中心温度の方が高かった。また，GE液60mLを袋のまま加温した場合，50℃の湯1Lでは加温の時間に関係なく適温に至らず，ピッチャーに50℃の湯を2L入れて5分間の加温で適温に至ることが明らかになった。本研究では，研究代表者として研究遂行の全てにおいて責任を持って行った。 共著者：細矢智子，大津真季子，平田礼子，山崎智代，小山英子

18.120mLグリセリン浣腸液の至適加温方法（査読付）	共著	平成25年3月	医療保健学研究　第4号 P9-P14	120mLグリセリン浣腸(GE)液の安定した液温と安全性を担保した加温法を実験的に検討した。加温はGE容器を袋のまま50℃の湯1L，3Lにより行い，10分までの経時的な中心温度(容器内グリセリンの中心温度)の変化を観察した。湯煎実験でGE液の中心温度が推奨温度である40℃に達する時間は1Lで6分，3Lで5分30秒であった。また40℃に達した後も加温を継続した場合，1L湯煎に比して3L湯煎はGE液中心温度がより高温で推移すること，3L湯温の方が高温を持続し冷めにくいことが判明した。臨床において過剰加温されたGEによる直腸粘膜損傷は極めて重大であることから，120mLGEの安全な至適加温法は袋のまま加熱する場合，湯温50℃湯量1Lにて6分と考えられた。本研究では，研究代表者として研究遂行の全てにおいて責任を持って行った。 共著者：大津真季子，細矢智子
19.グリセリン浣腸120mL容器の表面温度と中心温度（査読付）	共著	平成25年3月	医療保健学研究 第4号 P15-P19	グリセリン浣腸120 mL容器の表面温度を赤外線放射温度計により，中心温度(容器内グリセリン温度)をデジタル温度計によりそれぞれ測定し，加温前後で比較した。容器を袋から出して50℃，3Lの湯中で3分30 秒間加温した。容器表面と中心温度は加温により上昇した。加温前(常温)では表面温度に比べて中心温度が0.6 ± 0.2℃高かったが，加温によりその差は広がり2.1 ± 0.6℃となった。以上の結果より，赤外線放射温度計により計測した容器表面温度から中心温度を予測することができ，これはグリセリン浣腸液を適温で準備する際の目安になり得ることが示された。本研究では，研究代表者として研究遂行の全てにおいて責任を持って行った。 共著者：細矢智子，大津真季子
20.血圧測定技術試験に対する学生の認識と取り組み（査読付）	共著	平成26年3月	医療保健学研究 第5号 P159-P168	血圧測定の技術試験に関する学生の認識とその取り組みを明らかにすることを目的に，平成23～24年度のA大学の1年生で，基礎看護学分野における基本的看護技術に関する科目を履修し，血圧測定の技術試験を受けた学生を対象に調査した。自作の質問紙を用い，研究への同意が得られた53名を分析した。その結果，技術試験の本試験で合格した学生は35名(66.0%)，不合格者は18名(34.0%)だった。学生が自覚している自己練習の回数や時間，教員の指導の有無は技術試験の合否に影響していなかった。また，合格者の方が講義，演習，技術試験が技術の習得に役立つと感じている傾向が見られ，全般的な学習への取り組みに対する認識の違いが技術試験の合否に影響していた。今後，学生の自己練習の内容や自己練習時の教員の指導内容について調査，検討する必要があることが示唆された。本研究では，研究代表者として研究遂行の全てにおいて責任を持って行った。 共著者：細矢智子，三浦幸
21. 筋肉内注射技術試験に対する学生の認識と取り組み（査読付）	単著	平成27年3月	医療保健学研究 第6号 P19-P27	筋肉内注射の技術試験に対する学生の認識とその取り組みを明らかにすることを目的に，平成23～24年度のA大学の1年生で，筋肉内注射の技術試験を受けた学生を対象に調査した。自作の質問紙を用い，研究への同意が得られた53名を分析した。その結果，本試験の合否は合格者31名(58.0%)，不合格者22名(42.0%)だった。合否にかかわらずほとんどの学生は，演習が技術習得に役立つと捉え，技術試験の必要性を認識していた。合格者の方が講義や技術試験が技術習得に役立つと捉えている傾向にあり，全般的な学習に対する認識の違いは技術試験の合否に影響していた。また，自己練習の回数や時間は合否に影響していなかったが，合格者の方が自己練習時に教員の指導を受けている傾向が見られ，今後，自己練習の内容や教員の指導内容を検討する必要性が示唆された。

22.血圧測定技術習得に向けた学生の認識―インビューの内容分析―（査読付）	共著	平成29年3月	医療保健学研究 第9号 P11-P22	血圧測定技術の習得に向けた学生の認識を明らかにすることを目的に，A大学1年生の学生5名にインタビュー調査を行った。内容を分析した結果，154件のコードが抽出され，学生の認識は，[自己練習の工夫][教員指導に対する認識][技術試験に対する認識][臨床での困惑][技術習得の難しさ][実習の学びの深まり]の６つのカテゴリーに分類された。学生は工夫して練習し教員の指導で理解を深める一方，指導や評価に混乱することもあった。技術試験では緊張や不安を感じる中，試験の必要性に気づいており，実習で困惑しながらも，血圧測定を通して看護の学習の深まりを認識していた。指導において教員間で共通認識を持ち，学内で実際の患者をイメージさせるような工夫，実習ではその時，その場の状況でタイムリーに指導する中で学生の失敗を許容できる指導が必要であることが示唆された。本研究では，研究代表者として研究遂行の全てにおいて責任を持って行った。 共著者：細矢智子，山崎智代，三浦幸
23.看護職志望動機に関する文献研究―養成機関の分析― （査読付）	共著	令和2年3月	常磐看護学研究雑誌 第2巻 P31-P40	養成機関の種別（大学，短大，専門学校）による看護職志望動機を比較検討することを目的に，看護学生を対象に調査した59件の文献を分析した。対象文献全てが質問紙調査によるもので，志望動機の項目数は，短大，大学，専門学校の順で多く，専門学校に比べ大学の志望動機は多様性を示していた。志望動機の項目は，大学と短大で【選択の契機】【職業の価値認識】【経済的能力の獲得】【養成機関選択理由】【看護職への関心】【看護職志望以外の理由】【看護職への思い】【自己実現】【事象への関心】【宗教観】の10カテゴリーに，専門学校では【事象への関心】を除く同様の9カテゴリーに分類された。看護職志向や経済的能力の獲得，「何となく」などの消極的動機は，養成機関や時代の変化に関わらず共通する志望動機となっている一方で，看護基礎教育の高等教育化に伴い，大学志向のような養成機関選択の理由が志望動機の一要因となっているといった違いが見られた。本研究では，研究代表者として研究遂行の全てにおいて責任を持って行った。 共著者：細矢智子，山口幸恵，北島元治，河津芳子
24.看護系大学を志望した動機に関する文献検討－看護系大学学生を対象とした研究の分析－ （査読付）	共著	令和3年3月	常磐看護学研究雑誌 第3巻掲載予定 P25-P34	看護系大学の学生を対象に調査した文献を検討し，看護系大学を志望した動機の種類を明らかにすることを目的に，1989年～2017年までの看護系大学学生を対象に志望動機を調査した17文献を分析対象とした。志望動機を表す329項目を，Berelson,Bの内容分析を参考に，意味内容の類似性を検討，集約し，カテゴリー名を付した。その結果，看護系大学に入学した学生の志望動機は，【体験を契機とする興味・関心】【幼い頃からのあこがれ・夢】【資格取得を志向】【大学進学を希求】など，21カテゴリーを形成した。カテゴリー分類への一致率は，信頼性確保の判断基準を確保した。21カテゴリーは，学生の学修継続の意志を強め得る動機，入学後の学修満足度を高め得る動機，時代の変遷を経ても変わらず存在する動機，大学入学を優先とした動機などの特徴を示した。本研究結果は，多様化する学生の看護系大学を志望した動機の把握を目指す調査の参考資料として活用可能である。本研究では，共同研究者としてデータ分析，論文執筆における考察の助言を行った。 共著者：山口幸恵，細矢智子，北島元治，河津芳子

25.新設看護学部入学生の看護職志望動機と学習意欲の関連 （査読付）	共著	令和3年3月	常磐看護学研究雑誌 第3巻掲載予定 P35-P44	新設看護学部入学生の看護職志望動機を明らかにし，学習意欲との関連について検討することを目的に，A大学1年生を対象に，自記式質問紙および小竹ら（2014）が開発した「看護学生用学習意欲尺度」を用いて調査した。71名の分析から，学生の看護職志望動機は看護職の価値認識に関する割合が高く，大学志向を示すものや消極的な動機も含まれ，多様であった。看護職志望動機と学習意欲には強い相関は見られなかったが，志望動機の『医療関係の分野に興味がある』，『人の世話が好き』，『看護職は将来性がある』と弱い正の相関が，『成績に見合った大学学部』と弱い負の相関があった。また，『看護職は経済的に自立できる』や『入学前，適性検査で看護職に向いているとでた』は，下位尺度の「学習に対する自己の現状理解」と正の相関があった。志望動機が多様な入学生に対し，継続したキャリア支援と同時に学生の学習意欲を高めるような教育の質を確保する必要性が示唆された。本研究では，研究代表者として研究遂行の全てにおいて責任を持って行った。 共著者：細矢智子，北島元治，山口幸恵，河津芳子
26.COVID-19禍の基礎看護学実習Ⅲにおける臨地・学内併用実習の実践報告 （査読付）	共著	令和5年3月	常磐看護学研究雑誌 第3巻掲載予定 P23-P34	COVID-19により，2022年度基礎看護学実習Ⅲの臨地・学内併用実習について振り返り，今後の実習に向けた課題を見出すことを目的に，「成績評価」「看護技術の到達度」「授業アンケート」の結果を踏まえ，実習目標の到達度および実習方法について考察した。結果は，従来の実習と比較し，実習目標「立案した援助を安全・安楽・自立を考えて実施できる」の評価が高く，看護技術「清拭」「陰部洗浄」の到達度の割合に差はみられなかった。これは，臨地での限られた経験を実習指導者や教員が詳細に指導したことや，学内実習における経験で補っていたためと考えられた。しかし，「手浴・足浴」「洗髪」は臨地・学内併用実習の方が低かった。また，授業アンケートには，実習記録の提出が厳しいという記述があった。今後に向け，学内実習の事例および援助内容と実習記録の提出について検討する必要性が示された。また，実習施設への依頼や調整をより綿密に行うと共に，教員の教育力の維持・向上と，結果を踏まえた実習内容の改善および充実が課題となった。 共著者：細矢智子，山口幸恵，北島元治，萩野谷浩美
（その他） 「報告書」 1.内視鏡的栓塞療法を受ける患者の理解と看護-ロイの適応モデルを用いて-	共著	平成4年6月	臨床看護18(6) P742-P746	食道静脈瘤の治療法の一つとして行われる内視鏡的栓塞療法を受ける患者の事例を，看護理論の一つであるロイの適応モデルを用いて分析し，治療を受ける患者の看護を考察した。これにより，社会背景や生活背景を含めた患者の理解と，心理面での援助の必要性が改めて示され，患者の個別的な観察，コニュニケーションによる把握など，基本的な看護を日々の業務の中で継続して提供していくことの重要性が明らかになった。 本研究において，共同研究者として分析と考察を担当した。 共著者：大竹陽子，斉藤みゆき，成田智子，伊豆倉智美
2.看護基礎教育に関する報告書の概要―看護技術教育に焦点をあてて―（査読付）	共著	平成19年3月	茨城県立医療大学紀要 第12号 P141-P145	看護系大学の急速な増加に伴い，各大学それぞれの教育理念や目的，それにもとづくカリキュラム遂行により，看護学の学士課程では多様な教育内容が混在している状況にある。看護学教育の在り方に関する検討会は「大学における看護実践能力の育成の充実に向けて」と「看護実践能力の充実に向けた大学卒業時の到達目標」の報告書をまとめ，厚生労働省においては「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会」の報告書がまとめられた。これらの報告書を要約し，看護技術教育の課題を踏まえた上で教育内容の精選や教育方法の工夫を考えていくための資料とした。本研究では，研究代表者として研究遂行の全てにおいて責任を持って行った。 共著者：細矢智子，島田智織，小松美穂子

3. リハビリテーション専門病院における基礎看護実習の看護技術に関する学習内容と課題	単著	平成17年3月	平成16年度茨城県立医療大学研究報告書（奨励研究）P111-112	リハビリテーション専門病院で行う基礎看護学実習の中で看護技術の学習内容と課題を明らかにすることを目的に，平成15年度の実習を経験した51名の学生の看護技術チェックリストと実習後の課題レポートを分析した。その結果，一人で実施は，バイタルサインの測定48名(94.1%)，移送(車椅子)43名(84.3%)の技術項目などであった。課題レポートは全192件の記述内容中，「実習の反省」67件(34.9%)「実習から得た学び」63件(32.8%)などがあった。学生は施設の特徴を反映した看護技術を経験し，多くの学びを得ていることが明らかになり，学内において看護技術練習の時間と場の提供やOSCE実施に関し検討していく必要性が示唆された。
4.看護職志望動機に関する研究（課題研究報告書）	共著	令和4年3月	常磐看護学研究雑誌 第3巻 p57-60	看護学生を対象とした看護職志望動機に関する59件を文献検討した結果，看護系大学の学生を対象とした文献は17件で，専門学校に比べ志望動機の選択肢の項目が多かった。内容の分析では，看護系大学生の看護職志望動機には大学入学を優先とした動機が含まれ，大学志向による養成機関選択の理由が加わることで多様であった。また，養成機関に関わらず，時代の変遷を経ても変わらず共通して存在する志望動機があり，その中には「何となく」などの消極的動機が含まれていた。さらに，新設看護学部の入学生を対象とした調査では，看護職の価値認識に関する割合が高かった。看護職志望動機と学習意欲に強い相関は見られなかったが，医療への興味や人の世話が好きであること，看護職の将来性や自己の適性の認識，成績に合わせた進路選択は，学習意欲に影響していた。このことから，志望動機が多様な学生に対し，入学前から継続したキャリア支援と同時に入学後の学習意欲を高める教育の質を確保する必要性が示唆された。 共著者：細矢智子,山口幸恵,北島元治,河津芳子
5看護実践に必要な考える力を養う教育の検討（課題研究報告書）	共著	令和4年3月	常磐看護学研究雑誌 第3巻 p51-55	看護学の初学者に対し、看護実践に必要な考える力を定義し、その力を養うための教育を検討・実施した。当該科目では、症状のある患者の情報を提示し、患者に起きていることをアセスメントし、看護上の課題、看護の方向性をPBLにて学修した。授業後、学生に質問紙調査並びに面接調査を実施した。また授業前後で批判的思考態度尺度（CTSNE）を用いて調査した。質問紙調査では、学生は自ら学修する力、対象の状況を理解する力等が身についたと回答した。面接調査では、対象を捉えるための視点の広がり、情報の収集と整理、思考の言語化等ができるようになったことが示された。CTSNEは、授業後に有意にポイントが上昇し、批判的思考態度にも効果があることが示され、看護実践に必要な考える力の教育の一定の効果が示唆された。これらの成果は、初学者である学生が効果的に看護展開を学修する方略を示した点で意義があり、今後も教育・評価を継続していく必要がある。 共著者：沼口知恵子,南雲史代,福田大祐,黒田暢子,坂間伊津美,細矢智子,他6名
「学会抄録」				
1.基礎看護実習の新しい実習形態と学生からの評価	―	平成16年12月	第24回日本看護科学学会学術集会 （東京）	週2日間の病棟実習および，学内3日間の中で2日にわたり1回30分程度，病棟での情報収集を行うという新しい実習形態が，学生にどのような影響を及ぼしたのかを検討することを目的に，51名の学生を対象に，実習終了後に実習形態に関する自由記述のアンケート調査を実施した。学生は，じっくり考える時間を持ちながら体調管理を行い実習が行えたようであるが，週2日間の実習形態で実習が実施できる用件として，実習施設が隣接の付属病院であり，リハビリテーション専門病院であることも大きく関係していると考えられた。 共同研究者：細矢智子，野々村典子

2.看護技術習得における段取りシート導入の試みー実習における活用状況からの分析ー	―	平成18年11月	第5回日本看護技術学会学術集会 （岡山）	学内での基礎看護技術習得過程において「段取りシート」を導入したことが，その後の実習で活用できているかを明らかにするため，A短期大の3年生で１年次の洗髪の演習で段取りシートを作成した24名を対象に調査した。その結果，学生は，学内で作成した段取りシートの考え方が実習中の看護技術提供に活かされ，段取りを取るという考え方の必要性を感じていた。また，看護技術提供時に段取りを取るということは，「安全・安楽な技術提供」「技術の手順を知る」「看護技術の具体的な方法」「個別への配慮」などにつながるものと捉えていた。本研究において，データ分析を共同で担当した。 共同研究者：佐々木美樹，冨田幸江，細矢智子，仙田志津代
3.食事介助における患者役割体験の学習効果ー看護師役割と患者役割の演習後レポートの比較からー	―	平成18年12月	第25回日本看護科学学会学術集会 （神戸）	食事介助の演習で患者役割体験を行うことの学習効果について検討すること目的に，A短期大学看護学科１年生で演習に出席した40名（欠席１名）の演習後のレポートを分析した。学生のレポートから看護師役割373記録単位，患者役割313記録単位を抽出した。患者役割のレポートからは，患者心理に関する記述や，障害や体位の制限による食事動作の難しさに関する記述が多く抽出され，体験したことで患者の理解が得られている。一方，看護師役割のレポートからは患者心理に関する記述が少なく，介助の工夫に関する記述は多く見られ，学習内容が介助する側の視点に偏っている。このことから，演習で患者役割体験を行うことは患者理解の視点を得るのに効果的であるといえる。
4.基礎看護技術演習の患者役割体験に伴う学生の心理的状態	―	平成19年12月	第26回日本看護科学学会学術集会 （東京）	基礎看護技術の演習で患者役割を体験した学生の心理的状態を探ることを目的に， A短期大学看護学科１年生を対象に調査を行った。基礎看護技術の演習11項目において，演習時に患者役割を体験した感想（５件法）と，良かった点と困った点（自由記述）を研究者の作成した自記式質問紙を用いて調査した。演習項目の平均で約８割の学生が，患者の心理および看護技術の要点が理解できたと思うと回答し，約９割の学生が看護を学習する上で役に立ったと回答した。清拭と排泄に関する項目で恥ずかしいと思う回答が多かった。６割以上の学生が苦痛についてそう思わないと回答した。自由記述では，患者の気持ちが理解ができた，看護に役立った，恥ずかしかったなどの内容が抽出された。 共同研究者：細矢智子，佐々木美樹，山崎智代，小山英子
5.導尿演習で看護師・患者役割体験の順序と学習内容に関する一考察ー演習後レポートの内容分析からー	―	平成20年8月	第18回日本看護学教育学会学術集会 （つくば）	導尿の演習で，看護師・患者役割体験の順序と学習内容の関連について検討することを目的に， A大学看護学科１年生で導尿の演習に出席し，研究協力の同意が得られた57名の演習後のレポートを分析した。看護師役割を先に実施した学生は32名，レポートから146記録単位を，患者役割を先に実施した学生は25名，18名(72%)はその後の看護師役割を実施する際に「活かせた」と回答し，106記録単位を抽出した。レポートの内容は1)カテーテル挿入に関する記述，2)清潔・不潔に関する記述，3)患者への配慮に関する記述，4)物品配置に関する記述，5)自己の振り返りに関する記述であった。これはレポートが両役割体験後の演習後に記述されている点が関係していると考えられるが，学習内容の面で学生間の公平性が保たれていることが明らかになった。 共同研究者：細矢智子，山崎智代，佐々木美樹，小山英子

6.e-learningによる「妊婦検診に必要な看護ケア」の学習支援に関する研究－システムの利用結果から－	―	平成20年8月	第18回日本看学教育学会学術集会 （つくば）	母性看護の学習を支援する道具としてのe-learningシステムの利用状況を把握することを目的に，A大学３年生の母性看護実習履修者54名に提供し調査した。その結果，25名（46.3%）がシステムの利用申請をし，うち16人が実際に利用した。16名の利用状況はログオン回数の平均は1.3回，滞在時間の合計は平均58.0分，ログオン１回あたりの滞在時間は平均44.2分であった。今後は，システムに関してやコンテンツの学習利用に関しての学生の認識について調査および分析をすることで，システムの評価を行う。 共同研究者：安川揚子，島田智織，細矢智子，駒崎俊剛，小松美穂子，江守陽子
7.導尿演習で看護師・患者役割体験の学習内容 －演習後レポートの内容分析から－	―	平成21年3月	第22回日本看護研究学会近畿・北陸地区学術集会 （京都）	導尿の演習で，看護師・患者役割体験の学習内容について検討することを目的に，A大学看護学科１年生57名の演習後のレポートを分析した。その結果，看護師役割のレポートからは，1)カテーテル挿入に関する記述，2)清潔・不潔に関する記述，3)患者への配慮に関する記述，4)物品配置に関する記述，5)自己の振り返りに関する記述，の5つのカテゴリーが，患者役割のレポートからは，1)自己の感情や感覚に関する記述，2)患者への配慮に関する記述，3)看護師役の学生への要望に関する記述，の3つのカテゴリ-7が抽出された。看護師・患者役割それぞれのレポートに患者への配慮に関する記述が見られ，学生は患者体験で得られた羞恥心などの感情から看護へ結びつけて考えを深めていた。 共同研究者：細矢智子，山崎智代，佐々木美樹，小山英子
8.採血実習における患者役割体験後の学生の認識－採血終了後の調査から－	―	平成21年9月	第19回日本看学教育学会学術集会 （北見）	学生間採血実習における患者役割体験後の学生の認識を明らかにするため，A大学看護学科2年生に質問紙調査を行い，同意の得られた57名を対象に分析した。その結果9割以上の学生が「患者の心理を理解できた」「患者役割体験が技術習得に役立った」と認識し，「体験して良かった」と感じていた。多くの学生が採血の患者役割体験を肯定的に受け止め，患者心理の理解を深めることで看護師としての行動，手技について考えを深めていることが明らかになった。 共同研究者：平田礼子，山崎智代，佐々木美紀，細矢智子，小山英子
9.学生間で採血実習における看護師役割体験の学習内容－学内実習後の質問紙調査の内容分析から－	―	平成21年9月	第19回日本看学教育学会学術集会 （北見）	基礎看護技術の学内実習で学生間採血を体験した学生の反応と，学生が困難に感じた採血手技の要素を明らかにするため，質問紙調査を行い，同意の得られた57名を対象に分析した。その結果，9割が「駆血帯を適切に巻く」，8割が「安全な抜針」「静脈選択」「皮膚の伸展」「刺入方向が適切」の項目で「できた」と回答した。また，自由記述から108の記録単位を抽出し「モデル人形との違いに関する記述」が3割を占めていた。採血の手技について多くの学生は「できた」と感じているが，針の刺入感覚はモデル人形と人体での違いを感じ，モデル人形の練習のみでは習得困難な要素であることが明らかになった。 共同研究者：山崎智代，平田礼子，佐々木美紀，細矢智子，小山英子

10. グリセリン浣腸120mL容器の表面温度と中心温度	―	平成25年12月	第33回日本看護科学学科学術集会 （東京）	ディスポーザブルグリセリン浣腸120mL容器の赤外線放射温度計による表面温度とデジタル温度計による容器内部の中心温度の差を明らかにすることを目的に実験を行った。加温後，浣腸容器の表面温度の平均は38.8±0.5℃(38.2～39.3℃)，中心温度の平均は40.9±0.5℃(40.2～41.5℃)で，表面温度と中心温度は有意に異なっていた(p＜0.01)。中心温度と表面温度の差の平均は2.1±0.6℃(1.3～3.1℃)であった。加温前の表面温度の平均は21.9±0.3℃(21.4～22.4℃)，中心温度の平均は22.5℃(22.2～22.8℃)で，表面温度と中心温度は有意に異なっていた(p＜0.01)。その差の平均は0.6±0.2℃(0.1～1.3℃)であった。浣腸容器内部の温度は直接測定できないため，表面温度から中心温度を予測し，適温の目安にすることが可能であると考えられた。
11. 筋肉内注射技術試験に対する学生の認識と取り組み	―	平成26年11月	第34回日本看護科学学科学術集会 （名古屋）	筋肉内注射の技術試験に対する学生の認識とその取り組みを明らかにすることを目的に，平成23年度と24年度のA大学の1年生で，基礎看護学分野における基本的看護技術に関する科目を履修し，筋肉内注射の技術試験を受けた学生を対象に調査した。その結果，自己練習の回数や時間は合否に影響していなかった。しかし，合格者の方が自己練習時に教員の指導を受けた割合は多く，教員の指導の有無は合否に影響する傾向が見られた。また，合格者の方が講義や演習が技術習得に役立つと捉えている傾向にあり，看護技術習得に向けて学生の学習意欲を高めるような授業を展開することや学生が授業の重要性を認識できるようなかかわりが重要であると考えられた。
12.血圧測定技術習得に向けた学生の認識	―	平成29年12月	第37回日本看護科学学科学術集会 （仙台）	血圧測定技術の習得に向けた学生の認識を明らかにすることを目的に，A大学1年生の学生5名にインタビュー調査を行った。内容を分析した結果，154件のコードが抽出され，学生の認識は，[自己練習の工夫][教員指導に対する認識][技術試験に対する認識][臨床での困惑][技術習得の難しさ][実習の学びの深まり]の６つのカテゴリーに分類された。学生は工夫して練習し教員の指導で理解を深める一方，指導や評価に混乱することもあった。技術試験では緊張や不安を感じる中，試験の必要性に気づいており，実習で困惑しながらも，血圧測定を通して看護の学習の深まりを認識していた。指導において教員間で共通認識を持ち，学内で実際の患者をイメージさせるような工夫，実習ではその時，その場の状況でタイムリーに指導する中で学生の失敗を許容できる指導が必要であることが示唆された。本研究では，研究代表者として研究遂行の全てにおいて責任を持って行った。 共著者：細矢智子，山崎智代
13.看護師が期待する入職時の新卒看護師像―新卒看護師の円滑なスタートのために―	―	平成30年8月	第44回日本看護研究学会学術集会 （熊本）	看護大学卒業年次生が学士課程教育を通して修得したと認識する社会人としての基礎力ならびに看護師としての専門的能力と，看護師が期待する入職時の新卒看護師像を明らかにするため，学生と看護師を対象に調査した。内容は「社会人としての基礎力」6構成要素28項目と「看護師としての専門的能力」4構成要素25項目の質問紙を作成し，学生へは修得認識を，看護師へは期待する入職時の新卒看護師像について4段階（できない1，できる2，まあまあでき3，できる4）で回答を得た。「社会人としての基礎力」の＜社会人としてのマナー＞は看護師が有意に高値を示した。「看護師としての専門的能力」では，全てで学生が有意に高値を示した。学生は両能力共に看護師以上に修得していると認識していた。臨床現場は入職時の新卒看護師に対し，社会人としてのマナーを活用して職場に適応し，徐々に専門的な仕事ができるようになることを期待していると考える。 共同研究者：軽部由有子，髙村裕子，高橋由紀，細矢智子，松田たみ子

14. 看護職志望動機に関する文献検討―看護系大学の学生を対象とした研究の分析―	―	令和元年8月	第50回日本看護学会―看護教育―（和歌山）	看護系大学に入学した学生の看護職志望動機の類似性を明らかにすることを目的に17件の文献を分析した結果，265項目の志望動機が11カテゴリーに分類された。看護職志望動機には，「経済的能力の獲得」のように時代の変遷を経ても変わらず存在する動機や大学入学を優先した動機等が存在した。 共同研究者：山口幸恵，北島元治，細矢智子，河津芳子
15. 看護職志望動機に関する文献検討―養成機関別の分析―	―	令和元年9月	第21回日本看護医療学会（名古屋）	看護学生を対象に調査した文献から養成機関別に志望動機を比較検討した。その結果，看護職志望動機は養成機関にかかわらず10カテゴリーに分類され，共通するものもあるが，看護基礎教育の高等教育化に伴い大学・短大志向のような養成機関選択の理由が志望動機の一要因となるといった違いもあった。 共同研究者：細矢智子，山口幸恵，北島元治，河津芳子
16. 新設看護学部入学生の看護職志望動機と学習意欲の関連	―	令和2年9月	第22回日本看護医療学会（オンライン）	新設看護学部入学生を対象に看護職志望動機を明らかにし，学習意欲との関連について調査を行った。71名の分析結果より，多くの学生が看護職の価値を認識しての志望であった。看護を身近に感じる体験により医療への興味・関心が高まり，看護職の価値や適性の認識は，自身の目指す将来像が明確になることで学習意欲を高める要因になると考えられた。一方，成績に合わせた入学と認識している学生の学習意欲は低い傾向が示され，消極的動機の入学生も一定数存在した。 共同研究者：北島元治，細矢智子，山口幸恵，河津芳子